

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●



スポット

2

ミュージアムの収蔵品63
パノラマ写真

巻頭
つれづれ

3

ソラミスト安齋肇との共同—自由な発想力を

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安齋 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

5

核の平和利用…再び

「長崎の声：ヒューマニティを記憶に」、パグウォッシュ会議2015の参加者の視点から
立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授、立命館理事補佐〕

ここが
見どころ

6

マンガから戦争を考える

立命館大学国際平和ミュージアム副館長
田中 聡〔立命館大学文学部教授〕

運営委員
リレー連載

7

ギリシアの困難、トルコの苦境

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
小林 功〔立命館大学文学部教授〕

ミュージアム
おすすめの
一冊

9

村井章介 著
『境界史の構想』（敬文社 2014年10月刊）
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
金丸 裕一〔立命館大学経済学部教授〕

ミニ企画展示

10

開催報告（2015年9月～10月）

事業報告

11

- 特別企画展示 無言館／京都館—いのちの画室^{アトリエ} 開設10周年企画「手島守之輔・伊藤守正—ふたりの被爆画学生の絵—展」
- 2015年度博物館実習受け入れ
- ボランティアガイド学習交流会
- 小中学校教員下見見学会2015
- 声に出す平和への祈り～伝えよう未来へ、平和の守り手として～
- 立命館土曜講座「戦後70年と歴史認識について —『戦後70年』から何を学ぶか」
- 特別展 世界報道写真展2015

17

- 世界の平和博物館の紹介
立命館大学国際平和ミュージアム副館長 山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕
- ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 足立 恭子
- 2015年度入館者状況（2015年4月～2015年9月）、編集後記
- ミュージアムインフォメーション



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE



立命館大学
国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

パノラマ写真



1956年3月25日～5月6日頃の大阪・中之島（梅本忠男撮影）

これは、1956年ごろの大阪・中之島の様子を写したパノラマ写真です。撮影者である梅本忠男は、1902年生まれの報道写真家でした。編集者を経て、1938年に土門拳等と「青年報道写真研究会」を結成し、内閣情報局出版の雑誌『写真週報』のために多数の写真を撮影したことで知られています。『写真週報』は、写真を用いてわかりやすく国策を浸透させるため1938年に創刊され、国策とともに朗らかにそれに従う理想的な国民像が映し出される、国策の宣伝雑誌でした。そのため、今となっては、当時の銃後の人々の様子や生活風景を見ることができる貴重な記録でもあります。（立命館大学国際平和ミュージアムホームページ内の資料検索サイトではそのうち230点の作品を閲覧することができます。）梅本忠男は1944年に召集され、復員しましたが、戦後は報道写真から遠ざかり、パノラマ写真の製作に打ち込み、パノラマ写真機の開発に専念しました。パノラマカメラは19世紀半ばに開発されていましたが、誰でも手軽にパノラマ写真が撮影できるようになったのは、1990年代以降、使い捨てカメラ「写ルンです パノラミックHi」やデジタルカメラの普及によるものです。

この写真は、梅本が残したアルバムの中の1枚です。カメラや撮影方法を変えてパノラマ写真の実験を行っていた1950年代のもので、アルバムにはその工程やコメントなども記されています。

この1枚は渡辺橋北詰の辺りから撮影されたもので、中央に渡辺橋をとらえ、画面の奥には大同生命も写っています。中央の四ツ橋筋の右側には、大阪朝日ビルが見えます。大阪朝日ビルは1931年に朝日新聞の拠点として建設され、当時、奇抜な建築様式と洋食レストラン「アラスカ」や屋上の航空灯台などで「不夜城の摩天楼」と話題になった最先端のビルでした。2013年に解体され、現在ではこの場所に中之島フェスティバルタワーが建っています。

四ツ橋筋を挟んだ反対（左側）は広場になっており、その横にはかまぼこ型の屋根のアサヒアリーナ（スケート場）があります。このリンクは1952年から56年まであったものですが、写真を拡大すると、アリーナの側面

にatomの文字、また、建物角には「原子力平和利用展」の文字もあり、この写真は、1956年3月25日から5月6日に開催されていた「原子力平和利用博覧会」当時のものであることがわかります。原子力平和利用博覧会は、アメリカの広報文化交流局と読売新聞をはじめとした新聞各社が共催で開催し、東京を皮切りに全国各地で開催した展覧会です。戦後、核の利用を巡っては、新エネルギーとしての期待、安全性への懸念、原爆やビキニ事件の被害による核への嫌悪など様々な意見がありましたが、原子力が明るい未来をもたらすイメージだけを強力に宣伝するためにこの展覧会は開かれました。アサヒアリーナの前には、展覧会の開場を待っているのか、人だかりも見えます。全国で260万人以上の来場があり、大阪でも、約20万人が見学したといわれています。

今回、この写真に原子力平和利用博覧会の様子が映っていることは、秋季特別展「戦後を語る70のカタチ」準備の過程で戦後の関西の様子を写した写真を探中で、はじめてわかりました。

「朝日建築」でたどる中之島3丁目ヒストリー

<http://bb-building.net/project/asahi.html>

（2015年10月31日閲覧）

津金澤編『戦後日本のメディア・イベント：1945-1960年』
世界思想社、2003

（学芸員 兼清順子）



一部拡大

ソラミミスト安齋肇との共同—自由な発想力を

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 齋 育 郎

(立命館大学名誉教授)

■ 福島プロジェクトのためのクラウド・ファンディング

ずっと続けている「福島プロジェクト」の財政活動の一環として、昨年、「クラウド・ファンディング」を試みました。「福島プロジェクト」は、被災地の放射線環境を調べ、どうすれば被曝を減らせるかを提言し、被災者の疑問や不安に応えながら、「より安心な生き方」を模索していく活動です。

クラウド・ファンディングは、取り組みたい活動の趣旨をネット上で広くアピールし、見も知らぬ人々に「お心あらばご支援を」とお願いする仕組みです。宣言した期間内に宣言した額の寄付が得られなければ「未達成」ということで、ファンドは何も得られません。

私が掲げたテーマは、「福島の保育園児に安心な散歩道を！」。幸いたくさんの方にご支援頂いて目標を達成できましたが、ボランティアとして続けているプロジェクトの継続のために、とても助かりました。

ところで、このクラウド・ファンディングの看板には、実は、「イラストレータ安齋肇氏も応援」という「もう一枚の看板文句」がついていました。安齋肇氏は、テレビ番組『タモリ倶楽部』の「ソラミミスト」としても知られています。もう還暦を迎えましたが、若い人から中高年齢層まで人気があります。その安齋肇氏が、なぜ「安齋科学・平和事務所」のクラウド・ファンディングの看板に登場したのでしょうか？

■ イラストレータ・安齋肇との縁

実は、安齋肇は私の甥に当たります。彼の父（私の兄）は画家ですが、私は大学時代に兄の家によく出入りしていましたので、肇くんとは幼いころから親しんでいました。歳が一回りちょっと違うので、私が大学生のころ一緒にバスに乗ったりすると、肇くんは人の気も知らないで「おじさん！」と呼びかけたりしました。確かに「叔父さん」なので間違いではありません。

その後はアーティストと科学者という別々の道を歩んだので、共同で仕事をするようなことは余りありませんでしたが、クラウド・ファンディングの話を相談

すると「いいですよ」という話。クラウド・ファンディングでは、寄付して頂いた方にそれなりの「お返し」をするのですが、そこに安齋肇の作品やオリジナル・デザインの手ぬぐい、絵葉書などを用意できました。なかなか好評でした。

■ 六甲ミーツ・アートの「宿題工作展」

そんなある日、「六甲ミーツ・アート芸術散歩2015」という企画の一環として、安齋肇発案の「宿題工作展」というのを催すので、参加するアーティスト（朝倉世界一、安齋肇、白根ゆたんぼ、しりあがり寿、高橋キンタロー、薙野たかひろ、なんきん、パラダイス山元、ミック・イタヤ）の作品に、タレントの松尾貴史さんともども「校長」として講評を加えて貰えないだろうか、という話が舞い込みました。私は「一も二もなく」引き受けました。生来の「面白がり屋」というか、「出たとこ勝負好き」というか、初めて対面する訳の分からない作品にアドリブでコメントを書くなどという刺激的な仕事は、なんと興味深いことでしょう。松尾貴史さんとはずーっと前、「超自然現象を批判的・科学的に究明する会（JAPAN SKEPTICS）」の関係で知己を得、私はかなり長く会長を務め、松尾さんは今でも運営委員です。多才な人で、TVタレント、ナレーター、俳優、DJ、コラムニスト、折り紙作家、大学客員教授、雑誌編集委員、落語家など、活躍している分野は枚挙に暇がありません。

「宿題工作展」の会場はケーブルカー六甲山上駅のすぐ上の天覧台の横。会場には『宿題工作展スーパー大宇宙』という、ちょっと学園祭っぽい立て看板が出ていました。テーマは、「六甲山では昔からUFOがよく目撃されている」という「ウワサ」を取り上げたもののようです。私は20点ほどの作品を松尾さんと手分けして順次鑑賞しながら、所定の用紙にコメントを書き込んでいきました。

写真は私が朝倉世界一さんの作品『スーパー・サウンド・レシーバー』を鑑賞している様子を撮影したのですが、作品説明には、「当マシンは、本体上部の



朝倉世界一さんの作品「スペース・サウンド・レシーバー」を鑑賞する私



「宿題工作展」の出品者と。一番右が安齋肇、中央が松尾貴史、その左が私

パラボラアンテナでミリ波をキャッチ、常温光学系を経て、本体内部に格納された受信機のコルゲートホーンに集光、導波管型偏波分離機（OMT）により両偏波信号が分離、サイドバンド分離型超伝導ミクサによって中間周波数へと変換、解析された後、さらに音声に変換。音声化したデータを両手に装置したハンドフォンに送信し、再生する装置です」と、訳の分からぬことが書いてあります。この展覧会はハチャメチャの発想力を3次元空間で面白く視覚化するのがメインですが、この作品は聴覚も動員している点が特徴です。私は、「実は私は耳が悪いので、その分何でも聞こえます。これはスペース・サウンドを媒介する暗黒物質を特定する手がかりを与える可能性のある実験的研究だが、周波数の解析によって暗黒物質の素性を仮説として提案すればもっと良かったなあ」と、これまた訳の分からぬことを書きました。

朝日新聞夕刊の連載漫画『地球防衛家のヒトビト』でも知られるしりあがり寿さんの作品は、「神がビッグバンで宇宙を創造したときの請求書」のようなものでしたが、面白いことに、展示されているのは日本語で書かれたフツの、しかし、錆びついたような領収証です。私は、「自然科学的な宇宙史研究に社会科学的な証拠を提起した画期的な仕事だが、消費税を8%

としてある点で現政権の不評を買うかもしれない」と評しました。

互いに遊びの空間を漂いながら、発想の自由を丁丁発止競い合うような展示会なので、アーティストとして「マジにナンセンスに」取り組んで、「どうだ、参ったか!」というような「奇想天外の発想力」を見せつけることが命です。現代社会に生きてみると、どうしても時代を支配するあれこれの型に嵌め込まれてしまいがちですが、こういう集団には最も自由でハチャメチャで奇想天外であって欲しい—そう思います。工作展の作品はそれぞれに面白いものでした。

しかし、別室のTENRAN CAFÉで上映された「面白UFO映像ショー」を見るにつけ、UFOと言えばこんなものという既成概念からなかなか抜け出せていない面もあり、「自由でハチャメチャな発想力はそう簡単ではない」と感じた面もありました。「宿題工作展」を訪れたある人が、開口一番、「昭和だなあ!」と言ったらしいのですが、気づかないうちに「時代の間尺」に嵌っているのかもしれない。

■ 殻を破るということ

私たちが平和ミュージアムの企画を考えると、それまでの古い殻を破る、新しい魅力をもったアイデアを捻り出そうと腐心します。発想力豊かなアイデアマンがいつもイニシャチブを発揮してくれるとは限りませんし、みんなで寄ってたかって検討していると、殻を突き破る「クセのあるトゲ」のようなアイデアが削ぎ落とされ、平均的なアイデアに均されていったりします。

10月下旬に「平和のための博物館市民ネットワーク」の全国交流会が「ピースあいち」で開かれましたが、日本の平和博物館関係者は、このような場でそれぞれの平和博物館の取り組みについて報告し合い、経験や知恵や情報を共有しようと努力します。「なるほど、そういう手があるか」という気づきがあったり、「うちでも出来そうだ」と意欲を促されたり、互いの学び合いの場として大変意味深い取り組みです。

一方、そうした機会を活用しながらも、私たち一人一人が、参観者をハッとさせるような斬新なアイデアを編み出すために、常に古い殻を脱ぎ捨てるエビのような覚悟と心意気が必要なのではないか、「宿題工作展」に関わってそんなことも感じました。

核の平和利用…再び

「長崎の声：ヒューマニティを記憶に」、パグウォッシュ会議2015の参加者の視点から

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授、立命館理事補佐)

元軍人の心を動かしたのは、広島と長崎に落とした原爆による破壊と被爆者の苦しみと言われている。1953年に国連総会で、アイゼンハワー大統領は演説で、核の恐ろしい力を平和利用に向けて転回するために米国の技術移転を約束した。国際原子力機構、IAEAの設立を提言し、イランとパキスタンへ技術指導を初めての事例とし選ぶ。その出来事の60年後の今日、米国とイラン・パキスタンの外交関係を見てみると、どこで、なぜずれが生じたかを考えさせられる。核の平和利用と軍事利用は紙一重で分かれるもので平和外交を永遠には保証できないと危険がある。イランと米国の間で近年緊張していた外交が和らぎ、IAEAの監視の下、条件付きで核の平和利用を再び許可された。バラ色の希望が湧く言葉を今年のパグウォッシュ(Pugwash)会議でイランの副大統領が発表した。翌日の朝テレビをつけると、イランで反米デモが町中に起きている映像が流れる。真実はどこにあるのかと思わさせられた。パキスタンと米国の外交は同様に矛盾だらけで、故郷無きテロの支援の疑いで無人飛行物体ドローンの空爆が定期的に報道される。このようなことに直面する我々は核の平和利用をどう受け止めるべきか？原爆被害を受けた軍都広島と長崎は、戦後平和の番人といえる都市として生まれ変わっている。だがこのような環境の中でさえ、核廃絶と平和への希望を訴えた長崎の伊藤一長市長は2007年に暗殺される。実を言うと言論の自由を保障された平和大国日本の中でも、人間性(ヒューマニティ)が乏しくなる時がある。

1953年のアイゼンハワー演説は、平和への希望を浮かびあげながら、核兵器の恐ろしさによる抑止力が根底にある米・ソ連間の冷戦構造が深刻化する。翌年、1954年にビキニ諸島部で起こした米軍の水爆実験で被害を受けた住民が今日、60年後も自分の家に戻れない状態に置かれている。日本の漁船「第五福竜丸」の船員たちもその核実験の放射能被害を受けた。ノーベル賞受賞者バートランド・ラッセルとアルバート・アインシュタインは科学者十数名の署名の下、核廃絶を求めるラッセル・アインシュタイン宣言を提示する。日本からは物理学者の湯川秀樹氏がこの宣言の署名者の一人だった。この宣言は、ヒューマニズム(人間性)を中核に置けば、科学者であろうが、政治指導者であろうが、判断を誤る危険を避けられると訴えている。立命館大学国際平和ミュージアムで展示されている、元長崎市長伊藤氏の血で汚れたシャツを思い出し、人間性を失った瞬間の悲しみが湧いてきた。ラッセル・アインシュタイン宣言の精神を受けて1957年に科学と国際情勢を考えるパグウォッシュ会議が設立され

る。毎年理性の下で議論を積み重ねるパグウォッシュ会議は1995年にジョセフ・ロートブラット氏と共にノーベル平和賞を受賞する。2015年11月1-5日の間、長崎で上記の宣言の60周年を祝うパグウォッシュ会議の総会が行なわれた。今回8つの分科会に分かれて議論を行い、私は第7分科会「核の平和利用の視点」を論じるグループに参加させていただいた。

ビキニ諸島ほどではなくても、福島原発事故後10万人ほどが自分の家に戻れないまま4年間避難していることを考えると、核の平和利用も安全ではないと感じる。地震大国日本で原子力発電所の周りに安全な後背地獲得の困難、事故の犠牲者の暮らしの保証、事故時とその後の命への危険は判らぬまま福島原発事故を過去のものにしてしまえない。核廃棄物処理の面で放射能が安全になるまで1万年以上管理しなければならぬ責任を後世代に渡すべきかの倫理的問題がある。その安全を担保してもらえんことを若い世代が受け継いでくれても、4000年後のピラミッドの劣化を見ると実に安全性の保証はできないことは明らかである。蓄積される燃料の再処理によって高速増殖炉型の装置の核燃料の確保を考えると安全性と経済性の理由によりやめるべきではないかと議論が展開し、青森県六ヶ所村の再処理計画の見直しも話題になった。私もその計画の取りやめを考えてもらうための答申文書に署名した。核燃料を必要とするウランの濃縮も国際共同体の監視と責任の下で安全を保障できる場所で行うべきと提言された。軍事利用しやすいプルトニウムが発生する。原発を保有する日本や韓国のように自然災害が多い過密国家が耳を傾けるべきことだと思った。福島原発事故も同時に起きる複数の災害、地震と津波に対応できなかったことから、設計ミスがあり人災として名づけられている。このような議論に参加しながら核エネルギーの道を歩み始めた国は安易に取りやめられないことを自覚し、今後その道を歩もうとしている国も十分注意をし、核の平和利用についての研究開発を行うべきであろう。

平和利用を一瞬に軍事利用に転回できる危険があるからかもしれないが、核の平和利用であっても秘密主義の傾向がある。日本における「原子力村」の現象はその象徴とも思われる。言論の自由を保障した環境で核の平和利用を受け入れるべきか排除すべきかの冷静な判断を行うためにも社会的対話と討論を十分重ねなければならぬ。そこで核関連の知識を小中高大の教育のなかで義務付けてもよいのではないかと感じた。その理性の下での地道な活動を品格良く感じさせられる感性豊かな展示を行うことは立命館国際平和ミュージアムの責任でもあるだろう。

マンガから戦争を考える

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 田中 聡

(立命館大学文学部教授)

日本では幕末・明治時代以来、有名な人物や歴史的
事件などさまざまな事柄を取り上げたマンガが数多く
描かれています。マンガ作品は作家の奔放な想像力が
生み出したフィクションにすぎず、資料的な裏付けが
はっきりしない「嘘」であって、歴史について知り、
考える上での助けにはならないというのが、今から
30年くらい前までの一般的な理解であり、マンガに
なにがしかの「史実」を求めること自体に無理がある
とされていました。

しかし、膨大な情報を含む画像と、文字による台詞・
キャプションを組み合わせる状況表現するマンガは、
描かれている時代の空気感や登場人物の微細な感
情等をとらえることを得意としています。戦後、マン
ガは日本文化の代表的なコンテンツと認識されるまで
に成長し、生活の至る所にマンガに関わるものが溢れ
るなかで私たちは暮らしています。知らず知らずのう
ちに、物事を戯画化・誇張したり、マンガ的な擬音を
用いた会話を普通にする習慣が身についているので
す。まさに「マンガ化された」社会と言えるでしょう。
こうした社会において、根拠となる文献史料がそもそ
も欠けていたり、意図的に史実の一部が隠されたりし
た結果、歴史のなかで忘れられた問題について、イメ
ージを膨らませ、私たちのもつ歴史意識のあり方を考え
直すための格好の素材として、マンガは有益な「資料」
になり得ると思います。

さて、日本社会にとって、昭和戦前期から1950年
代（占領期）にかけての時期とは、数千万人の死者を
出した人類史上最大規模の戦争＝第二次世界大戦を経
験した特別な時代でした。敗戦によって、旧日本「帝
国」の支配下にあった地域から帰還して安住の地を求
める人々、また日本国内から祖国へ帰る人々など、数
百万人という規模の大移動が起こるなか、急速な民主
化・経済復興が進められていったのです。今に直接つ
ながる政治・行政のしくみや国際関係は、こうした激
動の歴史の中から生み出されたものであり、その意味
でこの時期は現代史の起点といえるかもしれません。
これまでにアジア・太平洋戦争を描いた作品は膨大な
数にのぼり、全容は掘めていませんが、「平和」につ
いて考える上で興味深い作品をいくつか紹介します。

『ゲゲゲの鬼太郎』で知られる水木しげる（1922年
生まれ）は、21歳の時に召集されてニューギニアの
激戦地へ送られ、九死に一生を得て復員しました。戦
場での過酷な体験をもとに描かれた『総員玉碎せよ！』
（講談社、初出1973年。文庫版1995年）は、未だに
遺骨も見つからぬままの無名兵士への鎮魂歌といえる
作品で、むせ返るようなジャングルをはい回る兵士達
の姿から、戦争や軍隊の理不尽さが伝わってきます。
あとがきには「この作品の90パーセントは事実です」

とあり、戦地で自分の部隊が全滅する危機から必死で
生還したのに上官から「なぜ死ななかつた」と問われ
たことへの怒りが根底にあることが分かります。氏の
ように兵士として経験した事実を基に創作された実録
的な「戦争マンガ」は、1960年代～70年代に少年誌
などで多数発表され、その一部は1980年代以降には
るぶ社の「平和漫画シリーズ」等の形で纏められて、
現在まで息長く読まれ続けています。

最近の注目すべき動向は、直接的に戦争を知らない
戦後生まれのマンガ家が、優れた作品を発表している
点です。おざわゆき『あとかたの街』1～5（講談社、
2014～2015年）は、名古屋の市街地を焼き払い、
30万人もの罹災者を生んだ大空襲（1945年3月12日、
19日、5月14日）に巻き込まれ、壊滅的な打撃を受
けた一家の姿を、当時国民学校生徒であった少女「あ
い」の目から描き出しています。作者自身の母の体験
に取材して物語化したもので、ありふれた日常生活を
戦争がどう変え、そのなかで人々がどう生き抜いて
いったかが活写されています。また、2004年に刊行
した『夕風の街 桜の国』（双葉社）が全く新しい視
点で『はだしのゲン』等と異なる「ヒロシマの原爆」
を描いたと高い評価を受けた、この史代は、『この
世界の片隅に』前・中・後（双葉社、2009年）で広
島市から呉市に嫁入りした「すず」を中心に、戦時下
の普通の人々の暮らしを描いています。苦難を乗り越
えて記憶を伝えた人々の栄誉を、どうやって語りつづ
かが、この作品の掲げた大きなテーマです。氏は従来
の「戦争マンガ」の中によく表れる、「昔の女」が戦
争を機に「悲劇のヒロイン」に変身」とか、「敗戦を
聞いて皆がほっとした」という語り方に違和感をもち、
「戦争で人が死んではならない」という安直な結論を
性急に語るのではなく、その時代を懸命に生きた人々
の声・思いを当時の記録から読み取り、柔らかく勁い
描線で丁寧に表現します。普通の生活の中に戦争はこ
のようにしてあったのだ、決してそれは特別なこと、
戦場で斃れてゆく無名の兵士達だけの悲劇ではなかつ
た。この作品が伝えようとするのは、こうした現代へ
の問いかけだと感じます。

戦後70年の間に起こった「戦争への意識」の変化
を踏まえつつ、それぞれの時期にどのような戦争観が
語られ、何がもたらされたかを問い直す必要がありま
す。近年の「戦争マンガ」の変容は、戦争という体験
を特殊なものとして、普通の日常とどう連なっていた
かを捉えようとするところに共通点があり、我々はこの
視点に学び、かつての戦争を現在の日常に繋がる身
近な出来事として、もう一度考えてみるべきではない
でしょうか。

ギリシアの困難、トルコの苦境

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 小林 功

(立命館大学文学部教授)

わたくしの専門はビザンツ（東ローマ）帝国です。ビザンツ帝国は古代末期から中世にかけて、現在の東部・中部地中海地域とその周辺部を長きにわたって支配した国家でした。そのため、わたくしも海外出張に行く場合、自然とその地域が多くなります。中心となるのはトルコとギリシアでしょうか。そして読者のみなさんもお存じかと思いますが、この2ヶ国は現在、国際社会の激動の中で非常に困難な状況に立たされています。

■ギリシアの経済危機をめぐって

まず、ギリシアに関しては、数年来続く経済危機が、国家を激しく揺るがしています。わたくしがギリシアを初めて訪れたのは約20年前のこととなりますが、アテネ・オリンピックが開催された2004年前後を境にして、特にアテネは急速に街並みが整備されたように感じます。そしてその後も、各地への高速道路の延伸（や再整備…例えばギリシア南部のペロポネソス半島に向かう高速道路を走っていたときには、何か所かで高速道路の拡幅やコース変更の工事が行われているのを目の当たりにしたこともありました）などのインフラ整備も着実に進んでいました。しかしそれは、背伸びしすぎた、あるいは山積する問題を先送りにしての政策だったようです。2009年秋の政権交代を期に発覚した財政赤字の隠ぺい、そしてそれに続く経済危

機は、ギリシアの国際的信用を地に落としただけでなく、ギリシア経済や国民を疲弊させ、不満をも高めることになりました。

経済危機がまだ発覚した初期に近い2010年3月にアテネを訪れた際、わたくしも偶然ゼネストに立ち会うことになりました。…バスや地下鉄などの公共交通がすべてストップし、博物館や遺跡などの公共機関もすべて閉鎖されていたので、市内中心部でのゼネストに巻き込まれるほかなかった、という方が実情に近いのですが（笑）。

アテネ市内中心部にあるシンダグマ広場と、広場と向かい合った場所に建つギリシア議会の周辺には多数の人々が押し寄せ（その中には消防服を着た消防士たちの集団すらいました）、議会の脇の主要道路は機動隊によって封鎖されていました（写真）。もちろんシンダグマ広場周辺だけに、人々が集まったわけではありません。デモはアテネ市内のもう一つの中心であるオモニア広場など各地でおこなわれ、ギリシアの人々の（いざという時の）行動力に驚いたものでした。

このような大規模なゼネストは、この後も何度も繰り返されました。こうしたデモによって、ギリシアをめぐる経済状況や国際的地位がにわかに改善・回復したわけでは、もちろんありません。しかしこうした、デモを通じたギリシア国民の行動や声が、今年に入ってから急進左派連合（シリザ）を中心とするチプラス政権の誕生につながったことは間違いありません。そしてチプラス政権は、国民の声などをも巧みに用いつつ、ドイツをはじめとする他のEU諸国とギリギリの駆け引きを展開中です。国際的には（そして日本でも）あまり評判がいいようには感じられないチプラス政権の行動ですが、わたくしには「意外にしたたか」に感じられます。

昨今は日本でも各地で大規模なデモが繰り返されるようになっています。日本のこうしたデモは、これからの日本を変えていく力になるのでしょうか？



アテネ市内中心部のシンダグマ広場とギリシア議会が機動隊によって封鎖されていました（2010年3月）

■ シリア難民とトルコ

トルコも、現在厳しい状況に立たされている国家です。ただしギリシアとはその質は異なります。トルコもギリシアと同様、近年急速にインフラ整備などが進行了しました。だがその背景にあったのは、21世紀に入ってから公正発展党（AKP）政権下での政治の安定、及び好調な経済発展に支えられていました。アテネと同様オリンピック誘致をも背景として（それだけではありませんが）インフラ整備を進めたイスタンブールだけでなく（もっとも、イスタンブールは今にいたるまでオリンピック誘致に成功していません）、アンカラやイズミールといったその他の大都市、そしてその他の地域の中小都市にいたるまで、インフラ整備の恩恵が進みました。また、わたくしは経済学の専門家ではないので印象論のようになってしまいますが、各地に大規模なショッピングセンターが建設されていることなどからすると、一定の購買力を持つ一般市民も増加している印象を受けます。

しかしトルコでも、近年はさまざまな混乱が生じています。その理由の一つには長く続いた好景気に陰りが出ていること、第二に、首相から大統領に就任したエルドアン氏をトップとするAKP政権の権威主義的傾向の増大などが挙げられます。ですが、最大の不安要因となっているのは隣国のシリア情勢です。シリアで長期にわたって内戦が続いていること、そしてその混乱に乗じていわゆる「イスラム国」がシリアでも勢力を拡大していることは、連日のように報道されている通りです。最近では、そうした混乱を避け、ドイツなどの西欧諸国をめざす難民たちが大挙して押し寄せている、という報道が繰り返されています。

日本での報道ではわかりにくいことですが、シリアからの難民は、2015年になって「突然」発生・急増したわけではありません。国際連合難民高等弁務官事務所（UNHCR）によると、2015年9月現在でシリアからの難民は約408万8000人、そのうちトルコに避難してきている人が約193万9000人（その他、レバノンに約111万4000人、ヨルダンに62万9000人など）^{*1}います。実に、シリア難民のほぼ半分がトルコ国内に滞在しているのです（その他の国々からの難民もいます）。それも最近急増したわけではなく、2014年末の段階でも約150万人のシリア難民がトルコに滞在していました^{*2}。わたくしも昨年春にイスタンブールを訪れた際に、さまざまな場所でシリア難民とおぼし

き人たちが物ごいをしているのを目にしています。最近大きな話題となった、エーゲ海をゴムボートで渡ろうとして命を落としたシリア難民の少年がいました。彼がなぜシリアから遠く離れたエーゲ海で犠牲になったのでしょうか。それはもちろん、彼らシリア難民がそれまでトルコに滞在していたからに他なりません。現在の報道では、トルコから西ヨーロッパに向かおうとする人々ばかりに注目が集まり、トルコ国内にとどまっている難民のことはほとんど報道されることがありません。ここでは西ヨーロッパに大きな影響を与えないと広く報道されない、つまりはトルコ（やレバノン、ヨルダン）にいる難民に対する国際社会の関心の低さが、図らずも露呈していると言ってもいいでしょう。

また、トルコはシリアと長い国境線で接しており、いわゆる「イスラム国」とも境を接しています。さらに、シリア国内のクルド人たちの動向はトルコ国内のクルド人にも影響を与えており、近年緊張緩和のきざしのあったクルド人とトルコとの関係も、再び悪化しつつあります。先に述べた経済的苦境も相まって、トルコは現在非常に難しい局面を迎えています。今後のトルコ政府のかじ取りに注目したいところです。

ギリシアにせよトルコにせよ、問題の背景には両国をとりまく国際関係や、歴史的な経緯などがあります。またギリシアの場合はEUという国家の枠組みを超えた巨大な地域統合、トルコの場合は現在の国家の枠組みや境界と齟齬をきたす人間集団の問題があります。方向性に違いはありますが、これらはいずれも、近現代の国民国家の枠組みがゆらいでいることを雄弁に示すものでもあります。なので、ここで書いてきたような状況や問題は、単にトルコやギリシア、そしてその周辺諸国だけの問題にとどまるものではなく、わたくしたちにとってもいずれは切実な問題として突きつけられる可能性があるということは、頭の中にとどめておくべきでしょう。

いずれにせよ、トルコやギリシア、そしてその他の東部・中部地中海地域にも平穏が戻り、安心して訪問できる日が早く来ることを願うばかりです。

*1 : <http://www.unhcr.org/55eed5d66.html>
(2015年10月4日閲覧)

*2 : <http://www.unhcr.org/pages/49e48e0fa7f.html>
(2015年10月4日閲覧)

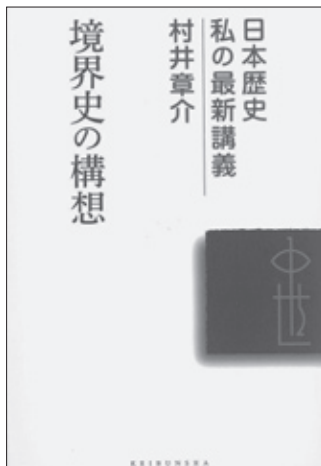
『境界史の構想』（『日本歴史 私の最新講義』12）

村井章介 著（敬文社 2014年10月刊）

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 金丸 裕 一

（立命館大学経済学部教授）



いま「国境」問題をめぐり、東アジアが熱い。この本は、これまで「あたりまえ」であると習って／思い込んできた事柄が、歴史学という古代から脈々と継承されている知の営みに基づく見識を通じて見た場合、その「常識」があっけなく打破されてしまう具体的事例を語る、優れた啓発書だ。もっといって、世俗的言説やネット空間における匿名かつ無責任で過激な

「落書き」によって特定方向からの刷り込みがなされてしまった方々に、是非とも直接手にとっていただき、みずからの意見の妥当性を検証する際の、思考素材にしてほしいと感じたので、この場を借りて紹介を試みたい。

それに先立ち、やや長い前おき。この文を読んでいる人の中で、死なない読み手は存在しない。少し難しい表現を使えば、個々の人間の存在には、永遠性は備わっていない。でも、それに気付いてしまうと、悲しかったり虚しかったり、あるいは怖かったりもするので、幾つかの仕掛けを考えだす。その一つが子々孫々にわたるイノチの継承という物語であり、家系や「種」の継続という現象のなかに、永遠性に近いものを発見して、ひと先ず安堵する。

さらに個人とは、あくまでも特殊単位として存在しているのだから、そこには普遍性は付与されていない。やはり、それではやり切れないと感じる人が多いからなのであろう、個としての存在の上位に、組織や国家といった集合的な存在を設定する。個としての自分は有限かつ特殊ではあるが、自らが所属する組織や国家には、永遠性や普遍性に近似した本質が備わっているのだと信じて、やがてこの世界から消えていかねばならぬ自分という存在の本質を隠蔽する。永遠かつ普遍的集団の一員であるから、自分にもきっとそのオコボレがくるだろうという発想なのだろうか。

しかし例えば、「国家」や「民族」という集合について、暫く沈着冷静に考えてみたい。それらを構成するメンバーは、出生によって増え、死去によって減り、百年も経過したら構成員ほぼ全てが入れ替わっている事実である。即ち、非流動的な「日本国民」や「中華人民共和国公民」といった存在は、作業仮説としてはさておき、実態として嘗て一度も現存したことがないのである。

村井章介先生は、日本中世対外関係史や、地域と地域のはざまに位置する空間において生活していた人々のあり方を描き出した『中世倭人伝』（岩波新書、1993年）などの業績で名高い、日本史学の専門家である。門外漢のわたくしが講義などにおいて、「東アジアにおいて国境という概念が存在していなかった19世紀半ば以前を対象とした論争において、当時成立していなかった概念を用いた議論は相応しくない」と片付ける諸問題について、史料の丹念な読解と批判的検討を前提として、極めて説得力ある丁寧な議論を進めている。蛇足的説明だと思うが、歴史研究者には、自説が依拠する史料＝証拠を明示する必要があり、第三者による妥当性の検証／反証に対して常に開かれた姿勢が義務付けられている。したがって「内」と「外」や「自」と「他」といった、国境概念成立以前の境界諸問題についての知見もすべて、村井氏が妥当であると判定した史料によって立てられているのだ。

そこに発見されたものは、何だろうか？異域や異界といった得体の知れない空間への入口としての境界のあり方や、そもそも「日本」と認識されていた地理的空間自体が時代によって伸縮していた事実、更に対外的な境界だけではなく、蝦夷や琉球を相手とした紛争や交渉。他方で、権力者同士による一連の紛争の中にあっても、境界を生活の現場として生きる人々の、とりわけ商人や漁民の、ボーダーを平然と越境するようになたくなさ。これぞ、前近代史の偉大なる遺産であろう。

村井氏は、結論部分でこう指摘する。「現在の国際社会では、地球上のあらゆる陸地と陸地の延長線上の海の一定部分が、いずれかの主権国家の排他的な支配下におかれることが正義と観念されている。……面積のない国境線と領土の排他性からなる国土観念は、国民国家を基礎単位とする（と観念される）近代国際社会においてはじめて、ゆるぎない正義となった。しかし前近代では、国境は輪郭不明瞭なひろがりであり、そこに生きる境界人が交易の主体として主体的に活動し、境界の両側を結びつけていた」と。

本書を読み進むにしたがい、読者には領土という存在も本質に可変的存在なのだという感覚が涵養されてくるはずだ。東アジアにおける国境トラブル解決に奮闘する当事者のみならず、社会の構成員一人ひとりにかかる歴史感覚が与えられたとするのであれば、日中韓三国政府が等しく主張する公式の「固有の領土論」や「先占論」そのものが非歴史的虚構であるという事実を啓示されると思う。この気付きを出発点に、次の一歩へと向かうための叡智が得られるのではないかと、そう強く期待する次第である。

開催報告（2015年9月～10月）

第95回 立命館大学生存学研究センター 特別企画展示 「放射能が降ってくる —ビキニ事件と科学者西脇安」

会期：2015年9月12日(土)～9月30日(水)

主催：立命館大学生存学研究センター

共催：立命館大学国際平和ミュージアム

立命館大学人間科学研究所・文部科学省私立
大学戦略的研究基盤形成支援事業「インク
ループ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環
型研究（基礎研究チーム）」

協力：東京工業大学博物館、東京都立第五福竜丸展示館
企画：「放射能が降ってくる—ビキニ事件と科学者
西脇安」実行委員会

放射能による環境汚染は今から約60年前の1954年
3月1日、マーシャル諸島ビキニ環礁におけるアメリ
カの水爆実験に巻きこまれた第五福竜丸の被災事件
(ビキニ事件) で世界的な問題となりました。当時の
科学者は専門家としての関心と社会に対する責任感か
ら放射能測定に取り組み、その活動はメディアを通じ
て人々に伝えられ、市民を中心に原水爆禁止署名運動
が起きました。

ビキニ事件の問題にいち早く取り組んだ科学者の一
人 西脇安は、ヨーロッパ10カ国を訪れて被害の実相
を伝え、その報告をもとに作成されたヨーロッパの学
者らによる核兵器に反対する「ラッセルアインシュタ
イン宣言」や、さらには科学者たちによる核兵器を廃
絶する国際的な会合「パグウォッシュ会議」開催へと
発展していきました。

展示ではそうした西脇安をはじめとする科学者の活
動や市民運動を、20枚の解説パネルやドキュメンタ
リー映像『死の灰』で紹介しました。また会場には、
第五福竜丸の模型やガイガーカウンター、帰港した際
に船から採取した「死の灰」、汚染したマグロのウロ
コのほか、西脇安の活躍を伝える新聞記事など、貴重
な資料11点を展示しました。

東京電力福島第一原子力発電所の事故（2011年3
月）以来、放射能による環境汚染問題が今なお大きな
社会問題となっている中、ビキニ事件当時の様子や実
物資料から伝わる恐ろしさ、科学者たちの熱心な調査
活動を知り、核利用や放射能の問題について改めて考
えるきっかけとなりました。

今号では2015年9月から10月の間に開催したミニ企画展示をご紹介します。



第五福竜丸の元乗組員が作成した模型を展示
(東京都立第五福竜丸展示館蔵)

第96回 第9回立命館附属校平和教育実践展示 立命館守山中学校・高等学校

会期：2015年10月11日(日)～10月23日(金)

主催：立命館守山中学校・高等学校

共催：立命館大学国際平和ミュージアム

この企画は立命館附属校5校の初等・中等教育段階
における平和・人権・地球市民教育の実践内容を紹
介し、今日の小学生・中学生・高校生の「平和」「人権」
「環境」などの課題に対する意識、「現代社会や世界と
の関わり方」に対する認識を、展示物を通じて知っ
てもらおうとするもので、今年で9回目を迎えました。
初回の立命館守山中学校・高等学校は『守山から世界
へ！～戦後70年、これから戦後であれ～』と題し、
中学2年生が長崎平和研修で学んだこと・感じたこと
をまとめた長崎平和研修レポート（平和新聞）や、戦
後70年と今後の平和を祈念し、文化祭でおおよそ300
本分の竹灯りを教室廊下に展示した竹灯りプロジェク
ト参加作品（一部）を展示しました。また、巨大展示
物とアニメーションの制作に取り組んだ内容を生徒自
らiPadで作成した動画で紹介し、平和研修（長崎原
爆資料館見学、原爆体験者のお話、平和セレモニー参
加）から生まれた生徒たちの「積極的平和は、周りの
人を大切に思う心と、学び続ける好奇心から生まれる」
というメッセージを表現しました。高校3年生はこれ
までの学習の総決算として、自分たちにできる国際協
力プランを考えたプレゼンテーションの発表レポート
を展示しました。



会場の様子

無言館／京都館 —いのちの画室^{アトリエ} 開設10周年企画 「手島守之輔・伊藤守正一ふたりの被爆画学生の絵一展」

会期：2015年7月1日(水)～8月25日(火)
主催：立命館大学国際平和ミュージアム
共催：一般社団法人 戦没画学生慰霊美術館「無言館」

2005年、立命館大学国際平和ミュージアムに開設した「無言館／京都館—いのちの画室」は、長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」が所蔵する、戦争により亡くなった画学生たちの遺した作品やスケッチブック、絵筆などを展示しています。

このたび、「いのちの画室」開設10周年を記念し「手島守之輔・伊藤守正一ふたりの被爆画学生の絵一展」を開催いたしました。本展では、広島、長崎それぞれの地で原爆に遭い命を落とした画学生二人の作品28点のほか、写真、軍事郵便、イーゼルなど彼らの遺品約30点もあわせて展示しました。

手島守之輔は、広島県出身で東京美術学校（現・東京藝術大学）油画科を卒業後、妻子を連れ故郷広島へ戻り中学校の図画教師をしていた時に召集されました。広島第2部隊に所属中の1945年8月6日、広島で原爆に遭い、その10日後に陸軍病院で亡くなりました（享年31）。展示では、故郷広島の瀬戸内海を思わせる穏やかな風景画のほか、広島で開催した展覧会の案内、妻へ送った手紙などが展示されました。

伊藤守正は、東京都出身で東京美術学校工芸科図案部に在学中の1943年に学徒出陣のため繰り上げ卒業となり出征しました。いくつかの部隊を経て長崎の部隊に配属されていた1945年8月9日、長崎に原爆が投下され、その翌日に現地に入り被爆しました。その後、復員し東京美術学校の研究科へ進みますが、1946年に戦病死します（享年24）。展示では、よく訪れていたという奈良ゆかりの作品のほか、東京美術学校仮卒業式（繰り上げ卒業のため「仮」が付されている）にて卒業生総代として読み上げた答辞、家族へ送った手紙などが展示されました。原爆投下直後の長崎の様子を母へ知らせた手紙には、このようなことは二度と

あってはならないと綴られていました。

二人の画学生の歩んだ道を思いながら描かれた作品を見ていただくことで戦争が奪ったものの大きさについて考えるきっかけとなったのではないのでしょうか。

【作家プロフィール】

手島守之輔（てしまもりのすけ）

1914年3月28日広島県生まれ

1934年4月東京美術学校（現・東京藝術大学）油画科入学

1939年3月東京美術学校油画科卒業

1942年結婚。戦況悪化に伴い妻子とともに広島県竹原へ戻り、中学校の図画教師となる

1945年8月1日臨時召集により応召。広島第2部隊所属。8月6日広島で被爆。8月16日大町陸軍病院にて戦傷死（享年31）

伊藤守正（いとうもりまさ）

1922年8月5日東京都生まれ

1940年4月東京美術学校工芸科図案部入学

1943年12月1日学徒出陣で応召。宮崎西部第138部隊、長崎県野母半島飛行機監視哨隊所属

1945年8月10日原爆投下翌日の長崎に公務で入り被爆後復員

1946年9月結核により戦病死（享年24）

◆「無言館／京都館—いのちの画室」のご案内

ミュージアム常設展示と合わせてご観覧いただける「無言館／京都館—いのちの画室」では、手島、伊藤のように画家となる夢を断たれた戦没画学生を慰霊し、彼らの遺した作品から美術へのひたむきな情熱を伝えています。

京都ゆかりの画学生の作品も展示しております。ぜひ一度ご来室ください。



展示室の様子



手島守之輔「海をのぞむ」



伊藤守正「奈良・高畑の道」

2015年度 博物館実習受け入れ

博物館実習は、学芸員資格取得を希望する学生がその過程で行う必須の科目です。今年度は、本学文学部2名、映像学部1名の合計3名を実習生として受け入れ、6月から8月の5日間の実習を行いました。

例年通り実習指導は、文部科学省「博物館実習ガイドライン」にできるだけ沿うことを心がけ、ミュージアムの専門に合わせた内容に設定しました。

実習内容は、収蔵庫や展示室、作業室の環境管理（温湿度計の調整作業や清掃作業）、寄贈資料の受入（資料の状態確認、資料カードの作成）など恒常的に行う学芸業務と特別展などの展覧会を開催する業務の体験として模擬展示を製作することが中心となりました。

模擬展示では、秋季特別展「戦後を語る70のカタ

チ」の1コーナーを担当してもらい、展示資料の選定、資料カードや実物資料を使った調査、キャプションやコーナー解説文、解説を補足する地図やグラフなどの作成をし、実際の展示も行いました。その成果の一部は、秋季特別展に活かすことができました。

実習の中では、学芸業務以外にも、ミュージアムの理念や設置目的を知るための館長講義や庶務、広報、イベント、図書管理、ボランティアの運営業務など博物館を支える多様な業務について理解できる内容も盛り込みました。

実習生には授業や学内実習では体験できない博物館の実務や現場の様子など、多くのことを学んでもらう機会となりました。



完成した展示の前で



資料カードの作成

ボランティアガイド学習会を開催

一昨年から継続して開催しているボランティアガイド学習会を今年度も開催いたしました。今年度はこれまでに2回開催され、その第1回は5月16日（土）に、東京大空襲・戦災資料センター学芸員で元当ミュージアム学芸員の山辺昌彦先生を講師にお招きし「東京大空襲を中心とする空襲について」をテーマにご講演いただきました。

第2回は、一昨年から引き続き「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動すること」をテーマに、名誉館長の安斎育郎先生を講師として7月4日（土）に開催いたしました。

いずれも当ミュージアムの会議室にて開催し、現役ボランティアガイドを中心として、第10回ボランティアガイド養成講座を修了し実地研修中の研修生や、学生スタッフも含め、第1回は33名、第2回は51名が参加しました。どちらもはじめの1時間は講演を行い質疑応答の後、グループに分かれて意見交換を行いました。最後に意見交換の内容を各グループから発表し、出席した皆さんの間で意見を共有しました。

第1回では、最近の研究成果にもとづいて新たに分ってきた東京大空襲の実態について山辺先生から分

りやすく解説いただきました。これまで考えられていたこととは異なる実態や、米軍の爆撃機が非軍事拠点以外の住宅地なども目標とした無差別爆撃であったことが分ってきたことなどをお話いただき、最大規模の空襲であった東京大空襲について最新の研究結果を学びました。

第2回では、立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動するにあたりガイドの間で継続して取り組んできた心構えについて、安斎先生からご講演いただきました。博物館施設では展示されている資料に即して見学者に解説をすることが鉄則です。この点を共通の認識として日頃のガイド活動に取り組むことが重要であることを強調されました。また、大人の団体見学者が増える時期に向け、最近の社会情勢や他館の展示替えの動向を受けて、当ミュージアムの展示にはない質問などが見学者からあった場合の考え方など、具体的な事例も挙げたご講演でした。講演後には質疑応答も活発に行われました。

今後も、国際平和ミュージアムでは時宜に応じたテーマで学習会を開催する予定です。

小中学校教員対象下見見学会2015

開催日：2015年7月29日(水)、30日(木)
8月18日(火)、19日(水)、20日(木)、21日(金)
開催時間：13：00～15：00
参加者：56校 109名
内容：安斎育郎名誉館長による国際平和ミュージアムの概要、活用法、平和学の講義、展示見学（ボランティアガイドの解説あり）、収蔵品（もの資料）の紹介、教育教材としての活用と貸出教材キットの紹介、個別相談会（見学受付、ガイドブックの事前送付等、各種サービスの案内）

当ミュージアムでは、2006年から毎年7月、8月に教員向けの下見見学会を開催しております。今年も近畿圏の小中学校を中心に昨年を上回る56校109名の先生方にご参加いただきました。

安斎育郎名誉館長はまず、「戦争がなければ平和と言えるのだろうか？戦争がなくても、直接的、構造的、文化的暴力が存在し、それによって一人ひとりの能力が豊かに花開くのが阻まれている状態は、平和とは言

えないのではないか。」という問いから、現代の平和学における平和の考え方を講義しました。そして、今後の平和教育のあり方について、「みて かんじて かんがえて その一步をふみ出そう」という当館のコンセプトを紹介し、主体的に考える姿勢をはぐくむことが重要と強調した上で、国際平和ミュージアムの小中学校における活用についてもお話をされました。



安斎名誉館長の講義の様子

当日参加された先生方からは「具体的に見学する際のイメージがわいた。」「実際の写真や映像、使われていた物などが豊富でよく分かった。」といった感想が寄せられました。参加者数も昨年度より増加し、今後は下見見学会に参加した学校の来館に結びつけていきたいと思います。

戦後70年平和企画

「声に出す平和への祈り～伝えよう未来へ、平和の守り手として～」開催報告

1. 企画概要

日時：2015年8月15日(土) 13：00～15：00
会場：立命館大学国際平和ミュージアム1階中野記念ホール
主催：立命館大学国際平和ミュージアム
協力：NPO日本朗読文化協会 朗読サークル「ことのは」
立命館生活協同組合 株式会社クレオテック

2. プログラム

- ◆オープニング：オリエンテーション
わだつみ像に向かって黙祷
- ◆いのちに触れる～無言館／京都館いのちの画室^{アトリエ}
見学（2階常設展）
- ◆いのちを語る～朗読ステージ（1階中野記念ホール）
開会の辞
朗読とスライド 『無言館』戦没画学生の絵によせて
『無言館 戦没画学生「祈りの絵」』他（著・窪島誠一郎）
朗読／秋山雅子 安倍真壽美 後藤春美 濱田和子 松田礼子
服部末友紀 林たのし 飛弾拓也 松倉あすみ（五十音順）
朗読×音楽演奏 『月光の夏』（著・毛利恒之）
朗読／植田聖子 ピアノ演奏／上村美智子
参列者による献花
エンディング：全員による「ふるさと」合唱
閉会の辞

8月15日、いわゆる「終戦記念日」の朗読企画には、出演者からの声かけなどもあり60人が参加しました。「散歩の途中に立ち寄った」「東京から見学に来て偶然」という方もあり、それぞれ「感銘を受けた」「感謝しています」といった感想を寄せていただきました。

豊富な経験のある日本朗読文化協会の有志の方々をはじめ、京都の朗読サークル「ことのは」など市民参加型の企画となるよう工夫しました。リハーサルを含め全体での調整時間が少ないなかでしたが、調和した雰囲気を出すよう協力して取り組みました。



『無言館 戦没画学生「祈りの絵」』他（著・窪島誠一郎）の朗読



「ふるさと」の合唱

2015年8月立命館土曜講座公開講演会～戦後70年企画～

「戦後70年と歴史認識について ―『戦後70年』から何を学ぶか」

8月22日：加藤陽子 東京大学文学部教授

「歴史に学ぶ、『戦争の気配』の感じ方」

冒頭、「今、戦争を考えることの意味」について説明があり、戦争を国家の約束とその結果生ずるあらゆる現象を全て攻撃することと定義するのであれば、現在は思想上の内戦であると述べられました。その上で、(1)歴史学の学問的特性として、「歴史学とは根本において批判」であり、そのために政治権力や宗教的権威に抗して真理のために著された過去の歴史学上の業績に真摯に向き合う必要があること、(2)現代は地球規模の大きな経済問題を抱えているという点で、1930年代から戦争の時代の歴史と比較が可能であること、(3)戦後は戦前の反省の上に築かれ、その後日本国憲法草案発表に繋がっていくこと、などが説明されました。

次いで、「なぜ、戦争を回避できなかったのか、なぜ戦いを止められなかったのか」について、(1)満州事変から日米交渉に至る過程の曲折と蹉跎、(2)つねに「被動のかたちを」をとる日本の国家戦略的スタン

スの特性、(3)作戦の意図を国民に伝えない秘密主義、(4)為政者の中における「間違った屈辱感」の醸成、(5)直近の総

力戦であった日露戦争に対する「間違った総括」による翻弄、などに注目した鋭利な論及がなされました。

これら講演の内容は来聴者の強い関心を触発し、質疑応答では、①戦前の「主権者」の概念、②日露戦争に対する「間違った総括」について、③日本社会における「無責任の体系」について、④子どもたちに近現代史を教える際のポイント・柱について、などの質問があり、加藤先生からそれぞれについて丁寧な説明が行われ、緊迫感と熱気が冷めやらぬ内に公開講演会は終了しました。



講演を行う加藤陽子教授

8月29日：白井 聡 京都精華大学人文学部専任講師

「永続敗戦レジームと戦後の終わり」

新安保法制をめぐる、国会では「安倍政権の暴走」「立憲主義の危機」が叫ばれています。しかし、この事態は、戦後日本の歩みから全く不可避的に生じてきたものにほかなりません。安倍政権とその取り巻きたちに見られる、混乱した自称保守主義、反知性主義、幼児性、これらすべては戦後日本社会が必然的に産み落としたものであり、戦後という時代の総決算として現れてきている、と現在の政治課題について語られました。

また、自身の著作「永続敗戦論」について、戦後日本の本質について、自分なりの結論に達しました。第二次世界大戦における敗北、これをあまりに安易な仕方では清算しなかったがために、現在の状況があるのではないのでしょうか。「永続敗戦論」の執筆動機として、沖縄普天間基地移設をめぐる日米の衝突と福島第一原発の事故があります。共通して見られる「無責任の体系」の本質としては、《実質》を閑却した《システムの自己維持》運動であり、『国体護持』のために勝ち目のない戦闘を延々と継続した点と、『原発推進体制維持』のために誰も責任を取らないという点が挙げられます。『戦後の核心』＝敗戦の否認であると言え、『敗戦の否認』に戦後レジームの全体重がかかっ

ています。「敗戦の否認」のロジックは、日本が戦争に負けていないのだとすれば、大義も、勝利の可能性も無かった戦

争を始めたことの責任を、誰も取る必要はないですし、反省する必要もありません。負けたことを認めていないので延々と負け続けることになります。すなわち、これは『永続敗戦論』であると言えるでしょう。安倍政権とは、言うなれば、永続敗戦レジームの純粋形にほかなりませんとの論及がなされた。

これら講演の内容は来聴者の強い関心を触発し、質疑応答では、①対米従属の問題性について、②アメリカ国家・社会＝軍産複合体制について、③今日の日本と中国の関係について、④マスコミの問題状況、⑤日本の近現代史一日清・日露戦争への評価、⑥今日の日本社会での民主主義革命とは、などの質問があり、白井氏からそれぞれについて丁寧な説明が行われ、緊迫・緊張感と熱気が冷めやらぬうちに公開講演会は終了しました。

以上2つの講演会で1,150名の参加がありました。



講演を行う白井聡専任講師

世界報道写真展2015 —WORLD PRESS PHOTO 15—

1. 開催会場（合計51日間開催・9,193名）

(1) 立命館大学衣笠キャンパス会場

会 期：2015年9月9日(水)～10月4日(日)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム
中野記念ホール

参観者：5,182名

(2) 立命館大学びわこ・くさつキャンパス会場

会 期：2015年10月6日(火)～10月18日(日)

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
エポックホール

参観者：1,466名

(3) 立命館アジア太平洋大学会場

会 期：2015年10月21日(水)～11月4日(水)

会 場：立命館アジア太平洋大学 コンベンションホール

参観者：2,545名

(4) 主催等

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、
朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会、京都府、京都市(衣笠キャンパス開催分)、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局(衣笠キャンパス開催分)、KBS京都
滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会、NHK大津放送局(びわこ・くさつキャンパス開催分)、びわ湖放送株式会社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社

2. 開催の状況

(1) 概要

今年で58回目を迎える「世界報道写真展」。立命館大学では1995年から毎年開催しています。展示される作品は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約150点で構成されます。

1年を通じて、世界の約100会場で開かれる本展は、世界最大規模の写真展です。今回は131の国と地域、5,692人のプロの写真家から10万点近い応募があり、「一般ニュース」、「スポーツ」、「現代社会の問題」等8つの部門で41人が入賞を果たしました。

今年の大賞は、デンマークのマッズ・ニッセン氏がロシアで同性愛の男性2人の姿を撮影した作品です。同氏は「ロシアでは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（LGBT）の暮らしがますます困難になっている。マイノリティーは法的、社会的な差別や犯罪の被害にさらされている」と述べています。

「一般ニュース」の部などでは、ウクライナの混乱を示す写真も受賞しています。セルゲイ・イルニツキー氏（ロシア）はウクライナ・ドネツク中心街の台所の残骸を撮影し、多数の死傷者を出した砲撃の惨状を静かに伝え、「一般ニュースの部」単写真1位を受賞しています。

いずれの会場とも多数の方々にご来場いただきました。写真一枚一枚に向き合うことで、「世界で今、何が起きているのか？」を受け止め、「平和とは何か？」を考えていただく機会となりました。

(2) アンケート等における反応

多数の方からアンケートに回答していただき、会期中に1,040通のアンケート回答を得ました。「普段あまり知ることのないテーマを扱ったものが多く、どの写真からも衝撃を受けました」「世界の現状を見たまま表現されていた、まるでその風景が目の前にあるようだった」「目をそむけたくなくなるような写真もあったけどしっかり受けとめ、ひと事ではないということを忘れないようにしたいと思った」といった感想が寄せられました。

毎年観覧している、継続的な開催を希望するという声も多数ありました。

3. 関連企画

(1) 公開記念講演会

日 時：2015年9月19日(土) 14:00～16:00

会 場：衣笠キャンパス 以学館2号ホール

講 師：森住 卓氏（フォトジャーナリスト）

参加者：110名

世界報道写真展の開催を記念し、「報道写真家の仕事」をテーマとして、一般のマスコミではなかなか報道されない部分の取材、撮影、その情報のリリースの現実を学生や一般向けに講演いただきました。

第1部では沖縄・辺野古や高江での新基地建設反対運動の現状や、イラクでの写真が反戦活動で様々な使用されたことや、旧ソ連の核実験場の被害者の話など、写真やグラフなど様々なデータをもとに貴

重な話をされました。自身の仕事について人間の尊厳が奪われた現場で、誇りを持って生きる人々について伝えようとしてきたとまとめられました。

第2部では山根和代副館長が司会をつとめ、会場からの質問をもとに産業社会学部・池尾靖志先生と対談、「フォトジャーナリストになった理由」「写真のモノトーンとカラーの違いについて」「沖縄の現状がなぜ本土に伝わらないのか」など、活発な対談となり、盛り上がりしました。

(2) 講演会とウッドコンサート ～レバノンから遠く離れて～

a. 〈衣笠キャンパス〉

日 時：2015年10月4日(日) 14：00～15：30

会 場：アカデメイア立命21

1階ロビー（世界報道写真展受付前）

参加者：83名

b. 〈びわこ・くさつキャンパス〉

日 時：2015年10月6日(火) 12：05～13：15

会 場：エポック立命21

1階ロビー（世界報道写真展受付前）

参加者：44名

「～レバノンから遠く離れて～」と題して講演会とアラブの民族楽器「ウッド」のミニコンサートを両会場前で行いました。

講演はレバノン出身の音楽家でレバノンのラップ音楽の第一人者であるワエル・クデ氏がされ、渡辺公三教授が逐次通訳をおこないました。

ワエル・クデ氏は初めに、レバノンの立地・歴史、多様な宗教・文化の混在する地域である背景から、レバノン内戦について述べられ、その後に、今回ウッド演奏とともに行うパフォーマンスの「グッバイ・シュレンドルフ」について、動画を交えて作品の解説をされました。

レバノン内戦で離散した難民たちが、カセットテープをやりとりすることで互いの無事を知ったことのエピソードも紹介されました。

その後のミニコンサートでは、ヤン・ピタール氏がウッドを演奏し、後半はワエル・クデ氏がラップで参加しました。

参加した皆さんは、レバノン内戦がおこるにいたった経緯について知るとともに、アラブの民族楽器の音色に耳を傾けていました。



写真展会場（衣笠）



レバノンから遠く離れて・講演（衣笠）



公開記念講演会第1部・講演



レバノンから遠く離れて・演奏（BKC）



公開記念講演会第2部・対談



写真展会場（BKC）

ウィルミントン大学平和資料センター40周年会議に参加して

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

アメリカのオハイオ州にあるウィルミントン大学に、平和資料センター（Peace Resource Center）があります。このセンターは、冷戦の真ただ中の1975年にバーバラ・レイノルズ（Barbara Reynolds: 1915-1990）さんによって創設されました。そこでは被爆者のメッセージを通して核兵器の市民への影響と世界平和の必要性について知らせるために、被爆30周年会議が開催されました。その後平和資料センターでは、大学や地域において被爆体験と世界の平和主義に関する歴史的資料を通して様々な取り組みをするだけでなく、色々な紛争解決に取り組んできました。9月10日から11日まで平和資料センター創設40周年記念会議が開催され、研究者や平和活動家が集まりました。会議のテーマは、「正義と平和：地域社会と国際社会への使命」でした。

バーバラ・レイノルズさんは広島に世界友情センター（World Friendship Center）を創設され、海外や日本人々が交流する場となっています。立命館大学では「国際平和交流セミナー」と「平和学セミナー」（留学生も受講し、著者が担当）のクラスの受講生が、毎年アメリカン大学の学生と広島と長崎へ行く際に、このセンターで被爆体験を学ぶようにしています。今年は「原爆の母」（Atomic Mom）という映画を見て、その映画監督と映画に出てくる被爆者のお話を聞く機会がありました。1950年代原爆開発の仕事に青春を賭けた一人の女性科学者を描いています。何十年も後、良心の呵責に苛まれた母の告白を記録する映画監督である娘さんと、自分が知らないうちに犯した罪の許しを請う母に救いの手を差し伸べる広島被爆者が登場する映画です。

私は会議で、「公共機関と地域社会の平和観」というテーマで、パネリストとして発言を求められました。日本における公立の平和博物館と私立の平和博物館、特に国際平和ミュージアムについて、報告をしました。その他のパネリストとして、デイトン国際平和博物館館長のジェリー・レゲット氏と、クウェーカー遺産センター代表のルース・ブリンドル氏が発言されました。

デイトン国際平和博物館にはその後訪問する機会があり、平和の実現のために努力している人々の展示が主になされていました。ガンジーのように国際的に有名な人だけでなく、地域社会で平和の実現のために活動している人々の展示、また環境問題を子どもや市民が身近に考えることができるような展示がありました。またウィルミントン大学のキャンパスにあるクウェーカー遺産センターも、訪問することができました。1927年には日米友好のために人形の交換をし、ウィルミントンから長崎の学校へ人形を送ったそうです。センターには、ひな人形が飾られていました。2012年にはウィルミントン大学から学生を広島へ送り、その訪問に基づいて展示を行ったそうです。

基調講演ではシカゴ大学名誉教授のノーマ・フィー

ルド氏の「正義のない平和はあり得ない」という内容でした。ちょうど派遣労働者に関する法案（改正労働者派遣法）が国会で通されましたが、貧困問題が存在していれば平和とは言えません。また福島原発の問題が解決されておらず、正義が存在していないので平和ということはできないという指摘をされました。

ではどのようにして地域社会や世界で平和の実現をするのかという問題について、いろいろなセッションで報告、討論されました。核兵器の問題では平和資料センター所長のターニャ・マウス博士がセンターの案内をしながらバーバラ・レイノルズさんの平和活動について紹介されました。1950年代アメリカが太平洋における核実験をする中、一家で太平洋にヨットに乗って反対の意思表示をしました。広島の被爆者の声に耳を傾け、ハンガーストライキも行いました。

ニューヨーク大学のジョイス・アプセル教授が、国際平和ミュージアムの展示は日本の戦争の被害だけでなく、加害の展示も行われていること、来年出版する著書で国際平和ミュージアムを紹介するというお話もあり、大変励まされました。単に平和研究をするだけでなく、平和教育を地域社会で行っていること、また海外（ケニアや南スーダンなど）で貧困問題に取り組んでいるクロスカルレント国際研究所の実践も、大変印象的でした。



ウィルミントン大学平和資料センター
(左の女性はセンター長のターニャ・マウス博士)



デイトン国際平和博物館の展示：平和のための英雄たち

「憲法コーナー」で自衛隊の問題を問われた時の経験より

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 足立 恭子

戦後70年目の今年、具体的な戦争体験を織り交ぜながらの展示解説が、いよいよ大切になってきたと実感しています。一方、来館する各校の対応は、以前多かった「宝さがし」のようなワークシート持参ではなく、事前学習をしてきちんとしたテーマを持って来る所が増えています。先日来館した滋賀県や三重県の小学校のテーマにも「戦争中の人々のくらしは？」というのがあり、大勢が町屋に入って来ました。

いわゆる「国民総動員体制」の説明をわかりやすくしたつもりでしたが、子どもたちは「そんな負けることがわかっているひどい状況で、なぜ当時の人たちは戦争反対が言えなかったのか？」という疑問を出しました。今の子どもたちにしたら当然の疑問です。

しかし当時、命がけで戦争に反対したごく少数の人々を除いて、一般の国民が「戦争反対」を口にすることがどんなに大変なことだったかを、町屋にある若い兵士の出征時の写真を手に取って説明すると、「この人は生きて還って来たの?」「死んだら誰が責任を取るの?」「僕だったら絶対行かへん」などから、「これからまた戦争になるの?」「安全保障とって、あれ戦争すること?」「私のお母さん、戦争反対のデモに行った、良かったって言ってた」などの意見までが出ました。

ここが大事な視点だと思い、展示物とおりのガイドからは少し離れましたが、彼らを「憲法コーナー」に案内しました。付添の先生に聞くと、憲法の大切さは教えてあるが、詳しい内容までは教えていないとのこと。ですから前文と第九条の「戦争の放棄」の文を見るのは、彼らにとっては初めてだったようです。今では中学生でも憲法の内容はほとんど知りませんから、「憲法コーナー」では小・中学生向きの分かりやすい解説がぜひ欲しいと思います。

悲惨を極めた15年戦争の教訓から生み出された現憲法精神、戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認を説明すると、すかさず「今の自衛隊はどうなんです

か?」との質問が出ました。聞くとこのグループには、お父さんが自衛隊員の男の子もいました。

瞬間迷いましたが、自衛隊が発足した当時の冷戦時代の状況説明は小学生には難しいので半ば省き、「日本は災害の多い国で、東北大震災やその他の災害では、いつも自衛隊員が、多くの人々を助けているね。今、日本人の大半は憲法は大切だと思っています。でも自衛隊については、昔みたいに海外へ戦争に出て行くのではなくて、国土と人々の命を守る自衛隊だったらいいと思っているのではないかしら」と答え、父が自衛隊員という男の子に「お父さんから何か聞いている?」と聞くと「お父さんはそんな話は何もしないけど、お母さんが心配している」と答えました。周りの子たちは皆真剣に聞いていました。私の対応はズルい答え方だったかも知れません。しかし、自衛隊員の子どもの傷つけるようなことは言えませんでした。

7月に、対応した本学各学部ゼミの学生の場合は、時あたかも国会周辺で連日安全保障関連法（いわゆる戦争法）反対の大行動が広がりかけていた時で、しかも来年から選挙権年齢が18歳になるので、彼らの関心は高く相当突っ込んだ意見が出ました。自衛隊が出来た歴史的経過を説明すると、「日本はその時点で憲法九条を改正すべきだった」「九条をそのまま読めば自衛隊の存在は明らかに違憲、護憲派はなぜ自衛隊を違憲と言わないのか」「九条は大切だと思う。しかし自衛隊は災害の多い国土の守り手として今のままでいい」「戦争法には絶対反対だが、憲法はこのままでいいのか」など。もちろん結論など出ませんが、彼らのいうとおり憲法に照らせば自衛隊の存在は明らかに違憲だと私は思います。しかし10月の朝日新聞の歌壇に「自衛隊に救われし命数知れず、このままでいい、このままでいい」という今の多くの国民の気持ちを代弁するような歌が出ていました。自衛隊員を守るためにも戦争法は廃止しなければ……と思いつつ、憲法コーナーでは今後も苦しい対応が続きそうです。

2015年4月
～2015年9月

入館者状況

◎開館日数

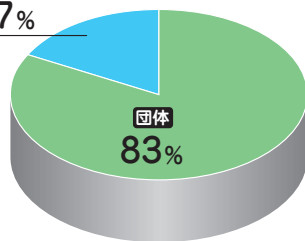
150日

◎オープン後常設展入館者数累計

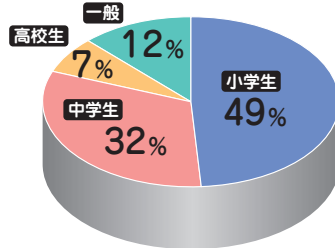
959,640名

<有料団体・個人入館者状況>

個人 17%



<有料団体入館者数状況>



2015年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	人数/開館日数
総入館者数/開館日数		1,670/25	6,926/27	4,042/25	3,634/27	2,762/26	3,985/20	23,019/150
特別展	春季特別展 『山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」』 特別展 『世界報道写真展2015 -WORLD PRESS PHOTO 15-』 京 都 (立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール) 滋 賀 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス エボックホール) 大 分 (立命館アジア太平洋大学 A棟2階コンベンションホール) 秋季特別展 『戦後を語る70のカタチ』	会期: 5/3～7/4 会期: 9/9～10/4 会期: 10/6～10/18 会期: 10/21～11/4 会期: 10/20～12/13 (10/20～11/20)						9,692 5,182 1,466 2,545 9,753
	小計							28,638
特別企画 展示	無言館/京都館-いのちの画室 開設10周年企画 「手島守之輔・伊藤守正一ふたりの被爆画学生の絵展」(国際平和ミュージアム ミニ企画展示室)	会期: 7/1～8/25						—
ミニ企画 展示	第92回ミニ企画展示 医の倫理—過去・現在・未来— ～日本医学会総会 2015関西に向けて～	会期: 4/2～4/14						—
	第93回ミニ企画展示 絶望の島から希望の島へ「クリオン島」—ハンセン病と差別の中に生きる人々—	会期: 4/19～5/24						—
	第94回ミニ企画展示 日本平和博物館会議 戦後70年共同展示	会期: 6/3～6/24						—
	第95回ミニ企画展示 放射能が降ってくる —ビキニ事件と科学者西脇安—	会期: 9/12～9/30						—
	第96回ミニ企画展示 第9回立命館附属校平和教育実践展示 (守山、小学校、長岡京、宇治、慶祥)	会期: 10/11～12/18						—
講演会 ほか	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」講演会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (5/3)	講師: 山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)						50
	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」ギャラリートーク (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (5/3)	講師: 山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)						45
	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」講演会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (5/30)	講師: 林 博史氏 (関東学院大学教授)						47
	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」ギャラリートーク (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (5/30)	講師: 山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)						30
	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」ギャラリートーク (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (6/16)	講師: 山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)						41
	ボランティアガイド学習会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (5/16)	講師: 山辺昌彦氏 (東京大空襲・戦災資料センター主任研究員・学芸員)						30
	「東京大空襲を中心とする空襲について—この間の調査の成果を中心に」講師: 山辺昌彦氏 (東京大空襲・戦災資料センター主任研究員・学芸員)	講師: 山辺昌彦氏 (東京大空襲・戦災資料センター主任研究員・学芸員)						55
	戦後70周年記念国際学術シンポジウム「欧州連合司法裁判所の役割」(後援) (国際平和ミュージアム 2階会議室) (5/22)	講師: 山辺昌彦氏 (東京大空襲・戦災資料センター主任研究員・学芸員)						55
	「欧州連合司法裁判所判例が国内法に及ぼす影響」講師: ロルフ・シュトゥルムナー (フライブルク大学法学部教授)	講師: 田中 優氏 (未来バンク事業組合理事長)						24
	NGOワークショップ あなたの金どこへ行く? ～私たちができる平和創造のための出資～ (6/19)	講師: 田中 優氏 (未来バンク事業組合理事長)						24
	ボランティアガイド学習交流会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (7/4)	講師: 安斎育郎名誉館長						44
	「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動することパート3」講師: 安斎育郎名誉館長	講師: 安斎育郎名誉館長						86
	親子の平和イベント ～「へいわ」ってなに? 2015～創作劇「ぞうのはなし」、「ムッツちゃんの影絵劇」、紙芝居、理科・図工	(7/28～8/2)						オープン
	平成27年茨木市非核平和展 みんなで考えよう世界の平和一貫出教材「さいころくん」を通して見る世界—	(6日間・7/29、7/30、8/18、8/19、8/20、8/21)						106
	小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会	(国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (8/15)						60
	声に出す平和への祈り ～伝えよう未来へ、平和の守り手として～朗読とスライド上映	(以学館 1号ホール)						672
	立命館土曜講座 歴史に学ぶ、「戦争の気配」の感じ方 講師: 加藤 陽子氏 (東京大学文学部教授)	(以学館 1号ホール)						471
	立命館土曜講座 永続敗戦レジームと戦後の終わり 講師: 白井 聡氏 (京都精華大学人文学部専任講師)	(以学館 2号ホール)						110
	世界報道写真展2015開催記念講演「報道写真家の仕事」—マス・メディアの伝えない「真実」沖縄・辺野古、高江の現状— 講師: 森住 卓 (フォトジャーナリスト)	(国際平和ミュージアム 1階ロビー) (10/4)						83
	世界報道写真展2015関連企画 レクチャー&コンサート ウードコンサートと講演会 ～レバノンから遠く離れて～ 講演: ワエル・クデ氏 ウード演奏: ヤン・ピタル氏、ワエル・クデ氏、仲野麻紀氏	(エボック立命21 1階ロビー) (10/6)						44
	【京都会場】	(国際平和ミュージアム 2階受付等) (10/1～12/13)						—
	【滋賀会場】	(立命館大学 地階301教室) (11/7)						48
	秋季特別展 「戦後を語る70のカタチ」	(以学館 2号ホール) (11/12)						250
	平和の缶バッチプレゼントキャンペーン							—
	映画上映会「家族」							—
	世界平和アピール七人委員会							—
	新しい戦前を作らないために—戦後70年の世界と日本— 講師: 土山 秀夫氏 (長崎大学名誉教授:ビデオレーター)、池内 了氏 (名古屋大学名誉教授)、高村 薫氏 (作家)、大石 芳野氏 (写真家)、池田 晋一郎氏 (作曲家:代読)、武者小路 公秀氏 (国際政治学者)、小沼 通二氏 (慶應義塾大学名誉教授)、モンテ・カセム (立命館大学国際平和ミュージアム館長)							—
	小 計							2,296

編集 後記

2015年は戦後70周年ということで全国的に多くの博物館において戦後70周年記念展や講演会などが取り組まれました。私も関わっています「平和のための博物館・市民ネットワーク」の通信「ミューズ」を見ますと、確かに平和博物館だけではなく、歴史民俗博物館、郷土博物館や公立博物館でも同様の取り組みが多いことがわかります。安全保障関連法の成立など武力で紛争解決をしようとする動きがある中、戦後の歴史をふり返って教訓を学び、未来に生かすことが重要ですので、このような展示は大変貴重であると思います。

今回のミュージアムだよりには、「マンガから戦後を考える」などユニークな記事や、土曜講座「戦後70年と歴史認識について」の報告、平和教育を推進するための小学校教員下見見学会、ボランティアガイド学習交流会など、多彩な活動について載せられています。

海外には「平和のための博物館国際ネットワーク」(INMP: International Network of Museums for Peace)の通信(日本では安斎育郎、山根和代が編集)があります(ボランティアガイドの谷川佳子さんたちの翻訳による日本語版もあります)。INMP通信13号には安斎育郎名誉館長が、「平和のための博物館・市民ネットワーク」全国交流会の記事を書かれています。またその市民ネットワーク英文通信「Muse」でも、国際平和ミュージアムを含む全国の博物館の展示や活動が紹介されています。国際平和ミュージアムだけでなく、他の平和博物館に関心のある方は、是非下記のウェブサイトをご覧ください。

INMP通信: <http://inmp.net/> 「ミューズ」と英文通信「Muse»: 東京大空襲戦災資料センターのホームページ~ <http://www.tokyo-sensai.net/>

山根和代

ミニ企画展示室

第96回ミニ企画展示

●「第9回立命館附属校平和教育実践展示」

会期：2015年12月6日(日)～12月18日(金) 立命館慶祥中学校・高等学校（北海道江別市）

展示内容

慶祥で平和と民主主義を学ぶ

- ・中学 朝日新聞社主催 平和短歌コンクール『八月の歌』応募作品190点（短冊）
- ・中学 戦後70年企画「北海道と戦争」調べ A4サイズ30点
- ・中学 平和を考える立命祭（学校祭）の取り組み紹介
- ・中学 平和を表現したバルサタワー（美術）
- ・高校 S G H校としての取り組み紹介

※立命館守山中学校・高等学校、立命館小学校、立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校は終了しました。



昨年度の展示の様子（慶祥中学校・高等学校）

《立命館附属校平和教育実践展示とは》

この企画は、立命館の初等・中等教育段階での平和・人権・地球市民教育の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生、中学生や高校生の平和・人権・環境などの課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするものです。戦後70年の今年、ミュージアムに来館する児童、生徒の皆さんや一般の方々に、あらためて平和を考えていただける機会になればと考えています。

第97回ミニ企画展示

●奥山美由紀 写真展「ディア・ジャパニーズ」

会期：2016年1月9日(土)～1月31日(日)

主催：オランダ公益財団法人アジア太平洋戦争 日本関連史資料および学術連絡支援財団（SOO）

内容：戦後70年。日本軍占領下の旧オランダ領東インド（インドネシア）で生まれ、今でも戦争の影に生きる日系オランダ人の存在を、彼らのポートレートを通して紹介します。



© Miyuki Okuyama 2015

第98回ミニ企画展示

●第21回京都ミュージアムロード参加企画 「京都の戦後開拓」

会期：2016年2月6日(土)～3月27日(日)

主催：立命館大学国際平和ミュージアム
京都市内博物館連絡協議会、京都市教育委員会

内容：戦争終結後、国内への復員や引揚者に対する失業・人口対策として、政府は戦後開拓事業による入植を推進しますが、その多くは農業条件の不利な場所でした。本展では京都の戦後開拓の様子を紹介します。



開拓の進む
京都市原谷地域
1954年
前原英彦提供

世界報道写真展2016について

次回で59回目を迎える「世界報道写真展」。立命館大学では1995年から毎年開催しています。展示される作品は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品で構成されます。

1年を通じて、世界の約100会場で開かれる本展は、世界最大規模の写真展です。世界報道写真展2016は立命館大学での展示が日本で最初の公開となります。ぜひご覧ください。

日程

【京都展】

立命館大学国際平和ミュージアム
2016年6月3日(金)～6月25日(土)

【滋賀展】

立命館大学びわこ・くさつキャンパス
2016年6月27日(月)～7月8日(金)

【大分展】

立命館アジア太平洋大学
2016年7月11日(月)～7月24日(日)

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

第23巻第2号（通巻66号） 2015年12月4日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行



立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>